

冬

『新壑』  
31-3号

路を悲惨に埋めて降る雪中をゆきて会ひたるは遠き血縁

烟るがに降る雪のゆたかに持つ融和感この冬人と親しみ易  
き

俯きゆけば貧しきもののみ集めるてストールに光る氷雨の粒

雪原に咲かさむと思ふ花の色みな暗く感慨なき冬は過去

何かが欠けてゐし私の冬期 ふゆ 忽然と耀よふは疎む思ひの夕  
焼

舞ふ塵のあまねく春陽に耀へり病夫の命 つま 今年も保たせたく  
て

華やかな愁をもつ夜の灯よ傾きゆけばゆらめく愉悦

昏冥なる季を彩りて冬の果実はかゞやけりこの瞳にのこる  
夜の舗

吾が冥さ何処より生れむ冬陽に霏する氷柱の日々<sup>ほそ</sup>決りて

人を嫉む季は吾にも寒からむどの窓も鎖されて疾き日の  
暮れ

昏き未米も知りいて自らを支えいるのみに籠る冬の季

衰弱せる吾が神経を犯しゆくは夜の顔雪の底もつ響

<sup>コーヒ</sup>珈琲色に日はたそがれて惜しみ会ふ貌と貌おぼろとなる原

春の夜

『新壑』  
31-6号

愉安いちずな象なし空に枝を張る春の樹々ら一せいに鋭  
し

吾が視野に区切られし空のみが藍堪え春はしきりと揺れ  
やすし

爽やかにわが裡潤ふ黄の果実剥かれて夜の無慙に堪ふる

地の続き有利鉄線めぐらされ吾には狭き日本となりたる

種子

『新墾』  
31-7号

軽ければ空にも舞ひて祭芽せむ掌よりこぼれて自在なる  
種子ら

偽りも評あはかれ易き季とならむ種子ら寡黙に地に埋められ  
つゝ

とりとめなき倖なれば揺れやすぎ風中に舞ふ蝶のひたすら  
も見む

雨降りていくらか潤ふ夜の道奢りいるものすばやく還さむ  
に

気重なるまゝ陽に跼むに何れの部分より解けほぐるゝなら  
む

枝折れて不具の形なす街樹あり頼らむとする人今より去  
らしめつ

愛されぬ気樂さながく希はむに黄の花腕に撓みつゝけざやか  
し

誑たぶかすごと舞ふ蝶を眼に追いつむる吾が不遇も謚かにながし

自由なき吾の前飛び易き構えに蝶は薄き翅をおろせり

犠性永く強いられて過ぎにきとこの日容赦なく蠅を打擲す

睨なみ得ぬ季と想えり身のめぐり埃立ち騒ぎくるまで乾きて

樂しまぬ事多き季も徐々に暮れ樹々の緑と一体の空

帰り米て静に用づるまなうらに匂い溢れて躡つは鋪の花々

貧しさの限界など識らず諍はぬときめて和らげば風何時よりも匂ふ

誰に頼らむあてなくて踏む土質の如湿りつゝ吾が裡冥し

耀やける夏の陽をあつめて佇つ家禽の脚吾より瘦せて

幼<sup>つか</sup>れて眼れば奢りのごとく吹く風よ季は豊に吾より逸れ  
つゝ

奢りの季と云はむ夥しく揺れつゝ風に鳴るは樹々の葉ずれ  
にして

吾が無謀の季も未だ昏れず蝶の飛翔のみがこの眠に滲みて  
しろし

肩怒る少年と短かく交はす語よあくがれのごと夏の夕焼

眼のうらに優しく蓄めて帰り来る虚飾なき彩のむらさき

萬年青

向日葵

『新壑』

31-11号

どの花も偽りなき色に咲きて  
絢爛たり墨色の花は吾が裡  
に咲く

枯れて尚泰然と立つ向日葵の翳に  
季は萃められており

猛り吹く風に従いゆかざれば  
こころしきりと渴きゆく昼

想ふ如夜の蘭は景を垂れて  
おり今日の所業の一つにねむら  
む

吾が温みに触れきて執する蠅も  
愛さむ苦衷やはらぎてよ  
り

充たされぬ話題よりぬけ出で  
たくしきりと仰ぐ空は紺碧  
に愁ふ

秋の扉を押して新聞屋三月後の  
予約を夫に強制している



冷たくも定まれる位置を羨しみつゝ陽にさわくと墓石を  
洗う

夜より持ち来し企み窓より放つ又一日を企てんがため

評…一日一日が企みであり、又真実である。「現代に生きる人間」の逃避出来ぬ現実に真向かって、その中に自分を大切に守って生きている作者であろう。上句に情景を設定し、下句に自己を表現する手法は、一つの型に定着しているようにも思われる。

菊に触れて一日この身匂えり秋は卑近な形に美化せり

書き送る手段にて説く誤解なれば悲しみは長きひとりの  
晩秋

言葉豊かに採られいる事告げられてより勁く自らを抱く

背きし事背かれし事の何れが貧し会いたる犬が聴き目を  
見する